

● 玉音盤の謎を追う ―録音原稿について

玉音盤は、1945年(昭和20)8月14日深夜に、44歳の天皇裕仁(ひろひと)が宮内省内廷庁舎2階の一室で読み上げた「終戦の詔書」の録音盤(セルロース盤)です。

警戒警報発令下に録音は2回続けて行われ、1回目の録音盤を副本、2回目のOKテイクを正本と呼びます。1回の読みが4分半なのに対して、音盤の収録時間は片面約3分なので、複数の音盤にまたがって録音されました。

正本は、録音2班が2組の録音装置で同時に録音した2枚組+3枚組です。一方が翌15日正午からラジオ放送されました。いわゆる玉音放送です。他方は放送会館地下1階の予備放送室に配されましたが、針を落とされることはありませんでした。

放送されたのが2枚組か3枚組かは不明です。玉音盤にはまだ謎が多いのです。



玉音盤(正本)と収納缶

天皇は録音に先立って、御文庫¹で原稿の下読みをしました。後出のタイプ版と思われます。

玉音盤は、2014年12月17日にKORGの録音機MR-1000でデジタル録音され、戦後70年を迎えた2015年8月1日に、宮内庁の英断によりウェブサイトで公開されました。

□ 宮内庁／終戦の玉音放送

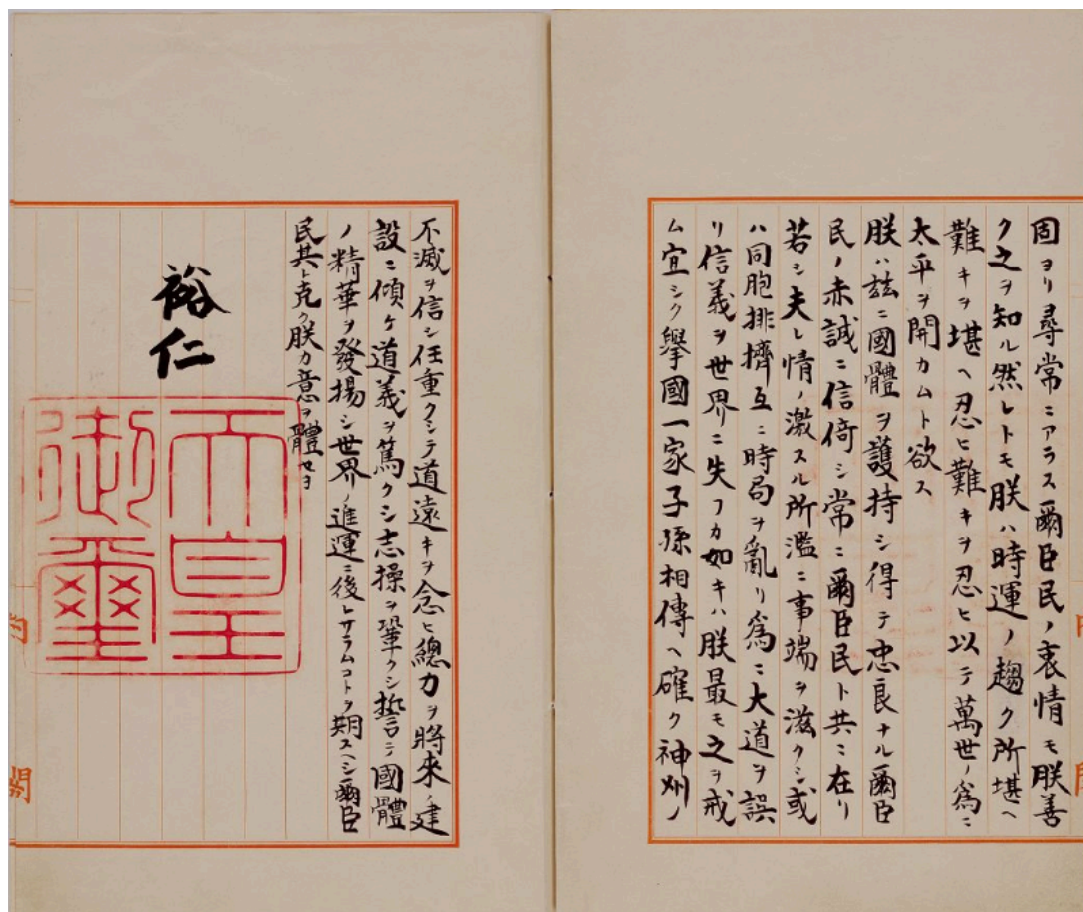
読み違いが4カ所あります。

1. 「べからざる」 → 「べく、べからざる」と読み直す
2. 「如くんば(ごとくんば)」 → 「ごと」を飛ばし「ぐんば」と読む
3. 「家業を失いたる者の」 → 「の」を読み落とす
4. 「排擠(はいせい)」 → 「はいさい」と読む

1. おぶんこ。1942年(昭和17)に吹上御苑に造営された天皇皇后の住居兼防空施設。鉄筋コンクリート造り、地上1階地下2階。防諜上の名称。

原文の「大東東亜戦争終結ニ関スル詔書」は国立公文書館が所蔵しています。本文802文字。御名御璽の後、「昭和20年8月14日」の日付、各国務大臣副署と続きます。紙は厚手の鳥の子紙です。鶏卵の色(鳥の子色)に近いことから、そう呼ばれます。

□ [国立公文書館／大東東亜戦争終結ニ関スル詔書](#)



本文に印影が重なるのは異例

乾かぬうちに重ねられ、右頁に印影が写っている

終戦の詔書(本文末尾と御名御璽、4～5頁／全7頁)

振り仮名はないので、幾通りかある漢字の読み方に決まりはありません。以下、括弧内の前者が実際の"読み"です。

- ・ 四国 (しこく／よんこく)、四歳 (しさい／よんさい)
- ・ 真に (しんに／まことに)
- ・ 五内 (ごない／ごだい)、大同 (だいどう／たいどう)

鞏く (かたく) の読みを、「つよく」とする識者²も複数あります(後述)。

2. 横溝光暉『昭和史片鱗』／加藤英明『天皇家の戦い』／竹山昭子『玉音放送』

漢字カナ交じり・旧字体旧仮名遣い・濁点なし・句読点なしで大変読みづらいです*3。

放送に向けて分りやすくということで、口語化が検討されました。しかし冒頭の一人称「朕(ちん)」でつまづきます。二人称の「爾(なんじ)」も同じです。"神"である天皇の言葉はその前例もなく口語化できなかったのです。時間も残されておらず、文語調のままとなりました*4。

その成立過程や、文案を巡っての半日を超える閣議の紛糾も、玉音にまつわるハイライトの一つですが、ここでは触れません。文末に参考文献を付します。

録音用の原稿は原本とは別に、宮内省総務局総務課の佐野恵作が墨筆浄書し、読みやすくするために句読点が朱筆されました。大奉書(おおぼうしょ)1枚に縦書き32行*5です。

板に鋏で留められました*6。録音にペーパーノイズが入っていないので、その通りだと思われます。見台を使ったとの図説*7もありますが、真偽は不明です。

これに対し「日本国憲法発布記念式典」(1946.11.3 貴族院)では、原稿は手持ちでペーパーノイズが目立ちます。

□ [NHK for School／日本国憲法の公布式典](#)

対内的にも対外的にも詔書の作成/発布は急がれていました。録音原稿ができ上がるまで(1945.8.14)の過程を次図に示します。閣議書別紙は内閣書記官長室で書かれたと思われます。

それぞれの清書やタイピングには、下書きとの照合を含め小1時間は掛かったと思われます。

□ [国立公文書館／戦争終結二関スル詔書案](#)

3『真空管の伝説』木村哲人 筑摩書房 2001 p.172

あの詔書を声を出して読めば分かるが、一度もつかえずに読むのは至難のわざである。私はテレビと映画で四度、俳優に詔書朗読をして貰った経験があるが、一度で読んだ人はいなかった。プロでも途中で必ずつかえてしまう。

4『昭和史の天皇 30』読売新聞社編 読売新聞社 1976 pp.396-398

5『徳川義寛終戦日記』朝日新聞社 1999 pp.268-269

6『証言 私の昭和史 5』東京12チャンネル報道部編 学芸書林 1969 p.175

7『20世紀放送史 上』日本放送出版協会 2001 p.190



日本国憲法発布記念式典

①は国立公文書館所蔵の「戦争終結ニ関スル詔書案」に綴られています。

この中に極秘印のある③もあります。③のみタイプ孔版印刷で、田畑喜代子内閣官房タイピストの手によります。誤字脱字を含めて9ヵ所の訂正があります。やはり急かされていたのでしょう。

当時田畑は官邸のタイプ室によく寝泊まりしていた。

③の謄写版(孔版)は閣議の出席者に配る20部程を印刷するのに適しています。1組は事前に天皇への内謁のために御文庫に届けられました*⁹。現存は2組4枚。

9 『放送夜話』日本放送協会 1968 p.69

③は官報の下書きに供された可能性もあります*¹⁰。

官報号外は23時に発布されました。これを受けて東郷外相名で、在スイスおよび在スウェーデン公使宛に「ポツダム」宣言の条項受諾の件の電報が打たれました。

10 『密室の終戦詔書』茶園義男 雄松堂出版 1989 p.20、p.51

詔書の煥発は内閣の担当で、通常はA→B→Cの順に行われます。急を要していたために、文書の作成は同時進行されました。この結果下書きの誤記があちこちに"伝染"したのです。

Dの玉音に関しては宮内省の担当です。責任者は加藤進総務局長。録音原稿④は所在不明です。佐野恵作は①の閣議書別紙を元に④を浄書し、花押済の閣議書も一緒だったとしています*¹¹。

11 『天皇の横顔』佐野恵作 奉仕会出版部 1953 p.38

しかし18時台に花押が済んでいるはずはありません。大いに疑わしいところです。

③は次の4ヵ所を訂正したとの記録があります*¹²。1は、訂正を主張する阿南陸相と米内海相の意見の対立した所として知られています。

12 『徳川義寛終戦日記』朝日新聞社 1999 pp.268-269 一部誤記あり

1. 「戦局日ニ非ニシテ」 → 「戦局必スシモ」
2. 「残虐ナル爆弾ヲ使用シ」の後に「テ頻リニ無辜ヲ殺傷シ」を挿入
3. 「測ルヘカラサルモノアリ」 → 「測ルヘカラサルニ至ル」
4. 「時運ノ命スル所」 → 「時運ノ趨ク所」

この訂正の有無によって、大局に変化があったとは思えません。

訂正を終えたのは20時2分とされています*13。

4カ所の訂正は、①～④で共通です。下書きの文面が同一だった証しです。②③の下書きが訂正前の①であった可能性も考えられます。

4カ所の訂正は、閣議に届けられた別紙案に、松阪廣政司法相が1の誤りを発見したのが端緒とされています*14。2・3・4の誤りも見つかり、急遽①②③④が訂正されました*15。その筆跡は①②③で異なるように見えます(下図参照)。

4カ所以外の訂正箇所はまちまちなので、清書やタイプの際に起きた個別のミスであると考えるのが妥当です。

何十カ所にもおよぶ字句の加除や入れ替えの揚げ句です。当時の混乱ぶりが伺えます。

13『天皇の横顔』佐野恵作 奉
仕会出版部 1953 p.43

14『密室の終戦詔書』茶園義
男 雄松堂出版 1989 pp.76-77

15 ②の訂正(少なくともその一部)
は宮内省で行われた可能性が高い

「終戦の詔書 資料で読み解く
二つの疑問」山田敏之 国立国
会図書館月報 2010年8月号
p.18

④の訂正は佐野恵作
『昭和天皇の横顔』佐野恵作 文
春学芸ライブラリー 2020 p.34



□ 国立公文書館／[官報号外 終戦の詔書](#) (1945.8.14)

アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シ慘害
 セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス
 世界ノ大勢力亦我ニ利
 テ頻々ニ無辜ヲ殺傷シ

日本標準規格 B4 (十行)

ニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢力亦我ニ利
 アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シ慘害

拘ラス戰局必スシモ好轉セス
 世界ノ大勢力亦我ニ利
 アラス加之敵ハ新ニ殘
 虐ナル爆彈ヲ使用シ慘害ノ及フ所眞ニ闊ルヘカラサルモノアリ而モ尙

受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然
 レトモ朕ハ時運ノ趨キヲ忍ビ以テ萬世ノ爲太平ヲ圖

- ①閣議書別紙／②御署名原本／③タイプ版／同
- ②-1は紙を削って書き直してある
- 成案の訂正箇所(部分)

◆ 鞏く (かたく) の読みについて

この読みを「つよく」とする識者があることは前述しましたが、調べた限りどの漢和辞典にも載っていません。

思わぬところに解明の糸口がありました。

『終戦の詔書』は国民 (臣民) 向けですが、これと対になる軍人向けの勅語が、8月17日に発せられました。

● 大東亜戦争終戦に際し陸海軍人に賜わりたる勅語

朕曩に米英に戦を宣してより三年有八ヶ月を閲す此間朕が親愛なる陸海軍人は瘡痍不毛の野に或は炎熱狂濤の海に身命を挺して勇戦奮闘せり朕深く之を嘉す

今や新に蘇国の参戦を見るに至り内外諸般の状勢上今後における戦争の繼續は徒に禍害を累加し遂に帝國存立の根基を失ふの虞れなきにしもあらざるを察し帝國陸海軍の闘魂尚烈々たるものあるに拘らず光榮ある我國體護持の爲朕は爰に米英蘇並に重慶と和を媾せんとす

若し夫れ鋒鏑に斃れ疫癘に死したる幾多忠勇なる將兵に對しては衷心より之を悼むと共に汝等軍人の忠誠遺烈は萬古國民の精髓たるを信ず

汝等軍人克く朕が意を體し鞏固なる團決を堅持し出處進止を嚴明にし千辛萬苦に克ち忍び難きを忍ひて國家永年の礎をの遺さむことを期せよ

(※原文カタカナ、下線引用者)

文中に「鞏固 (きょうこ)」の語が出てきます。「鞏く」を「つよく」とするのは、鞏固 = 強固からくる誤読と思われます。

「鞏」には「つかねる」「かたい」などの意があります。

『終戦の詔書』について先の図にまとめましたが、実はもう1通あります。

それは1945年 (昭和20) 9月2日に東京湾上の米戦艦ミズーリ号の甲板で行われた降伏文書の調印式に関係します。相手方に手交するための『終戦の詔書』が必要で、新たに1通作られました。

後に米スミソニアン博物館に展示されました³。

3. 『内務省外史 続』大霞会編 地方財務協会 1987 p.283

■ 参考文献

● 終戦の詔書

- 『昭和史片鱗』横溝光暉 経済往来社 1974
- 『密室の終戦詔勅』茶園義男 雄松堂出版 1989
- 「終戦の詔書成立過程」石渡隆之『北の丸』国立公文書館報 第28号 1996.3
- 『昭和天皇・終戦の詔書』聖徳顕彰会 展転社 2002
- 「終戦の詔書 資料で読み解く二つの疑問」山田敏之 国立国会図書館月報 2010年8月号
- 『終戦詔書と日本政治』老川祥一 中央公論新社 2015
- 『安岡正篤と終戦の詔勅』関西師友協会編 PHP研究所 2015

● 昭和天皇・終戦

- 『終戦秘史』下村海南 講談社学術文庫 1985
- 『終戦史録 5』外務省編 北洋社 1978
- 『昭和天皇の戦い』加瀬英明 勉誠出版 2015
- 『大日本帝国最の四か月』迫水久常 河出文庫 2015
- 『機関銃下の首相官邸』迫水久常 ちくま学芸文庫 2011
- 『日本のいちばん長い日 決定版』半藤一利 文春文庫 2006
- 『昭和史の天皇 4』読売新聞社編 中央公庫 2012
- 『一死、大罪を謝す』角田房子 ちくま文庫 2015
- 『侍従長の回想』藤田尚徳 講談社学術文庫 2015
- 『今上陛下と母宮貞明皇后』筧素彦 日本教文社 1987
- 『目撃者が語る昭和史 第8巻 8・15終戦』福島鑄郎編 人物往来社 1989
- 『昭和天皇独白録』寺崎英成 文春文庫 1995
- 『侍従長の遺言』徳川義寛／岩井克己 朝日新聞社 1997
- 『徳川義寛終戦日記』徳川義寛／御厨貴・岩井克己 朝日新聞社 1999
- 『昭和天皇実録 第九』宮内庁 東京書籍 2016
- 『昭和天皇の横顔』佐野恵作 文春学芸ライブラリー 2020

● 玉音盤に関しては次に詳しい記事があります

- 「[ステージ・サウンド・ジャーナル](#)」日本舞台音響家協会 → 「玉音盤の謎を追う」
2021年 7月号／9月号／11月号
2022年 1月号／3月号
2023年 3月号

※ 「玉音」については、刊行物・証言・ネットなどに、不正確なものが多く出回っています。
詔書に関しては、閣議書別紙と御署名原本との混同などが見られます。
本稿は複数の情報源に当たり、正確を期すべく改訂を重ねていきます。